



TITLE:

花山だより(八月)

AUTHOR(S):

星見山人

---

CITATION:

星見山人. 花山だより(八月). 天界 1934, 14(162): 471-471

ISSUE DATE:

1934-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166889>

RIGHT:

## 花 山 だ よ り (八月)

今年はどうした事かお天氣が馬鹿に不良で、と言ふよりも雨の神様が依怙最負をしたので、降らない所では田の水が無くて植付が出来ない許りでなく、上水道の斷水までしなければならぬ程であるのに、降つた所は大抵水害を受けた様で、去る七月中旬富山縣下の水害に遭つた人の話を聞くと、雨が降つてゐると言ふよりも、バケツが何かで水を流してゐると言つた方がよく表現された由。正に盆を覆す様な降り方だつたに違ひない。其の時の水死人の中には、出水を見物に行き、自分の立つてゐる岸の底部が水で洗ひ流され割り取られてゐるのに氣付かず、遂に岸の土塊と共に濁流に飲まれたと聞いては物凄かつた水勢もどうやら想像出来る。それは扨て置き、八月に入つてから花山は殆んど雨水の恩恵に浴さず、井戸水も次第に減じて、寫眞の現像、宿舎員の入浴も中止して辛じて炊事に事缺かぬ有様であつたが、遂に21日に至て斷水ポンプ故障で「事缺く」様になつて了つた。丁度夏休み中で少人數ではあつたが總動員して、2町下つた稚兒ヶ池まで、バケツを持つて水汲みに出かける騒ぎにまでなつた。此の斷水の最中の22日に、2ヶ年の外遊から去る16日歸朝された川崎俊一氏が山本先生と共に山に來られた。正午、山を去られる迄臺員一同應接室に集つて、旅行中のお話を伺つた。此の遠來の賓客を迎へて、斷水のためとは言ひながらお茶も十分上げられなかつた事は甚だ遺憾であつた。尙、斷水は23日ポンプ修理と共に復舊した。

今年の帝大の夏期講演會は本月1日より10日迄の間に開かれ、山本、上島兩先生は夫々異つた方面から天文學を連日講演せられたのであるが、科外講座の一つとして、6日夜花山で天體觀望が行はれた。幸ひ快晴に恵まれ100名程も集まり、午後10時半頃迄、柴田先生は汗ダクで説明に當られた。尙柴田先生は本月31日の夜お父様になられ、新しいお母様並に嬢ちゃんと共にお肥立ちよき由、誠に目出度い極みです。星見山人謹んで本誌上より御祝ひ申上ぐる次第である。

28日より31日まで稻葉、公文兩氏は、又30日夜山本先生と共に神戸菰部氏お宅の經緯度觀測に出張された。使用機械は萬能經緯儀、恆星時クロノメータ、タイムは直接花山のシンクロノムと有線電話で比較、此の爲め高城氏は花山に残つて、無線報時受信並に有線報時發信に活躍された、(星見山人)